

大聖院：チベットの砂曼荼羅

この2つの大きなチベットの砂曼荼羅は、伝説に名高い仏僧の空海（774～835）による開基から数えて1200周年を祝った2006年以来、観音堂に展示されています。2006年の祝賀式には、大聖院が属する真言宗と教義的・歴史的な結びつきが強いチベット仏教の一宗派の宗教指導者であるダライ・ラマ法王が招待されました。この曼荼羅はその時に、ダライ・ラマ法王に随行したチベットの仏僧によって描かれたもので、完成までには3週間を要しました。

仏教における曼荼羅は宇宙を図案化したもので、さまざまな形態のものがあります。チベット仏教では、色をつけた砂で作る曼荼羅が特に一般的で、浄化を表すとされています。祈祷のために作られた砂曼荼羅は通常、物質世界の無常を象徴する行為として、祈りを捧げた後はすぐに壊してしまいます。しかし大聖院の砂曼荼羅は、今後の参拝客のためにそのまま残されています。